

# 秋田城跡(秋田市)

秋田城は733年に出羽の国に築いた、ヤマト王権にとって日本海側の最北の古代城柵(エミシに対峙する軍事拠点)で、北方世界との交流の拠点、大陸の渤海国との外交拠点でもあった/これは秋田城跡の全体図



秋田城の政庁跡と、城内東大路の先にある東門の外に展開する城外鶴ノ木地区の位置関係をアップで見たところ/政庁跡→城内東大路→外郭東門→秋田城跡歴史資料館と進んでみよう



まず、「秋田城跡歴史資料館前」というバス停から政庁跡へと進もう/前方に案内板が立っている



ここを登ると政庁跡のエリア/ここで振り向いた方向に南門があり、その先は城外南大路だったようだ  
([クリックしてビデオを見る](#))



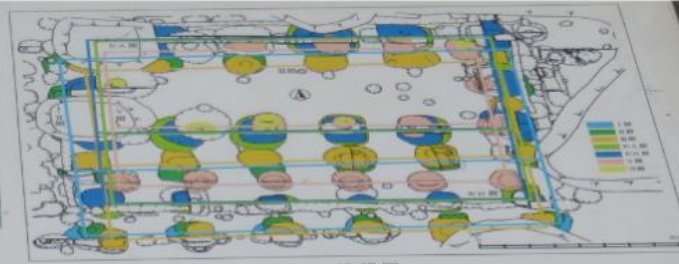
ここが政庁跡のエリアで、正面は正殿跡



## 正殿跡についての説明板



発掘状況（南から）



遺構図

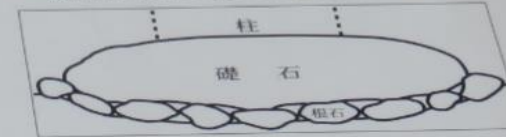
### 正殿跡

正殿は、秋田城で最も重要な建物です。正殿や前面の広場では出羽国の政務や、定期的に貢ぎ物を持って訪れる蝦夷に対しての贈り物、宴も行われていたと考えられます。また、時には外国からの使節を迎える儀式も行われていました。

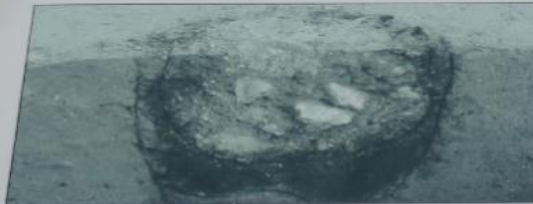
この建物は、ほぼ同じ場所で6回建て替えられています。最後の建物は石の上に柱を立てる礎石式の建物ですが、それ以前の建物は直接地面に柱を埋め立てる掘立式の建物でした。



礎石（土台になる石を安定させるため使用した石）発掘状況



礎石（土台石）据え付け状況模式図



焼けた白壁が入っている柱跡



焼けた白壁（拡大）

創建期の正殿の床には埴（古代の煉瓦）が敷かれていました。それは、Ⅱ期建物の柱を立てるための穴から多量の埴が出土したことでわかりました。

また、元慶2年（878）に起きた蝦夷の叛乱の時、焼け落ちて再建した建物の柱跡から白壁の一部が発見されており、白壁の建物であったと考えられます。

This is the most important building in Akita fortified government.

Politics, ceremonies, the winning Emishi, an ancient population in northern Japan, and so on had been done in this area.

The main hall had been rebuilt six times at the same place.

The sixth main hall is the building constructed on base stones.

White wall pieces plastered over the main hall are excavated from this place.

左手(西側)から見たところ



南西側から見たところ





東側から底部分を見たところ



同じく身舎部分を見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



こちらは正殿の南西にある東脇殿跡/西側から見たところ



北側から見たところ



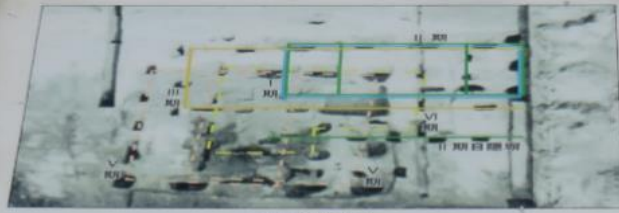
南西側から見たところ



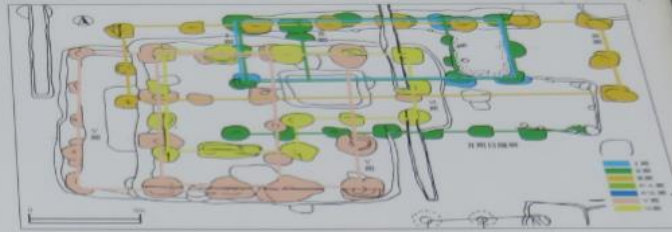
こちらは北東建物跡/南側から見たところ



## 北東建物跡の説明板



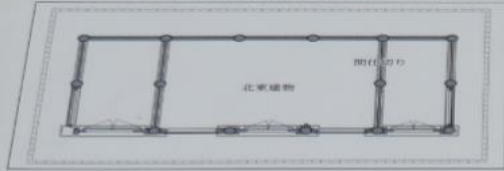
全体発掘状況



遺構図



II期建物復元立面図



II期建物復元平面図

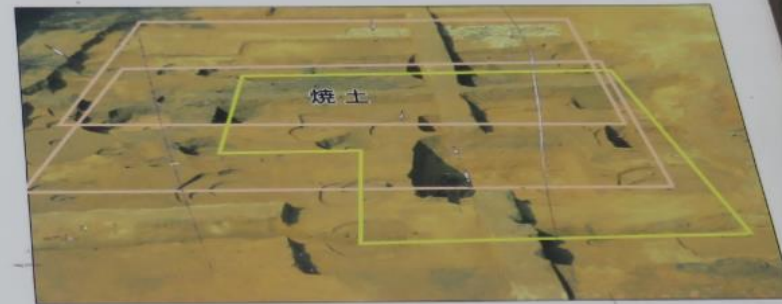
### 北東建物跡

ここでは5回建替えられた建物跡が見つかっています。

I期～III期の建物はいずれも東西の方向に長く、II期では、東西両側に壁で仕切られた部屋があり、建物の南には、目隠し塀が付いていました。

壁で仕切られた部屋のある役所の建物は、後殿や脇殿に見られますが、分室化されているのは、建物の機能や使われ方に関係があるものと考えられます。

V期～VI期の建物は、いずれも30cmから50cm、地面を掘り込んだ竪穴状の内壁に沿って、柱が立てられています。これらの建物跡については、掘立柱と竪穴が組み合う構造や、床と考えられる部分が赤く焼けていることから、火を使用する施設と考えられます。



新しい時期の建物跡発掘状況（東から）

This is the building that stood at northeast to the main hall.

This building had been rebuilt five times at the same place.

The east and west length of buildings from the first to the third were more longer than north and south one.

Especially, the second building had partition walls and a blindfold wall.

The structure of the building from the fifth to the sixth was the combination of a pit and a embedded-pillar building.

東側から見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





南西側から見たところ



政庁の東門

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



東門を潜り、城内東大路に出たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



## 城内東西大路の説明板



航空写真

### 城内東西大路

この道路は、政庁から外郭東門に至り、外郭外側までほぼ真っすぐに延びていました。ここが道路だと分かったのは、固く締まった道路面や、東西方向の素掘りの溝である側溝などが発掘調査で検出されたからです。

その発掘調査から、6時期の変遷があったと考えられる道路幅は、奈良時代には12m、平安時代には9mありました。

今回復元対象とした道路は奈良時代のものです。

また奈良時代の道路周辺からは、外郭東門周辺部と同様に周囲に遺構が認められないことから、周辺の利用に関しては建物を建てることのできないなどの制約があったと考えられます。

なお平安時代以降については、政庁にほど近い道路北側が、恒常的に鍛冶等の生産施設として利用されていたことが、発掘調査から分かっています。

文化庁・秋田市教育委員会

各時代の道路構造

道路構築の様子

道路面は雨水でぬかるんだりしないよう、写真のように敷ならした土を何層にもつき固めて作られていました。

This structure has been restored from the Nara period. It was identified as a road during excavation because of its hard surface and grooves. The surface of the road was formed by compacting of many layers, as seen in the photograph.

左手を見ると、政庁の第1期～3期の復元模型が展示されていた



さまざまな説明板がある



# 政庁とは

## 政庁の機能

政庁は、秋田城跡で最も重要な区域です。政庁内の建物である正殿やその前面の広場では出羽国の政務を執り行ったり、定期的<sup>みつ</sup>に貢ぎ物を持って訪れる蝦夷の人々を迎え、味方に引き入れる目的で、位階や布などを与えたり、宴<sup>うたげ</sup>を催したりしていました。また、文献史料や水洗<sup>ゆうこうじょうちゆうらん</sup>厠舎跡から検出した有鉤条虫卵<sup>ほっかい</sup>の存在から渤海など外国からの使節を迎えての儀式も行われていたと考えられます。

## 政庁の変遷

政庁は、区画施設や正殿などの建物の建替えなどから、おおよそ6時期の変遷があったと考えられますが、その中でも大きな変化は、第3期、第5期、第6期に認められます。

第3期では、政庁域全体で大規模な整地を行い、創建から政庁を囲っていた築地塀<sup>ついでし</sup>をやめ、柱を等間隔に立て並べその間を横材などでふさいだと考えられる一本柱列塀にするなど、全面的な改修を行っています。また、第5期は878年(元慶<sup>かんきょう</sup>2年)に起きた蝦夷<sup>えみし</sup>の反乱(元慶の乱)の時焼失した後建造したもので、政庁を囲っていた一本柱列塀を材木を隙間なく立て並べた材木列塀に変えたほか、門の構造や建物配置も大きく変化させています。

さらに、第6期では正殿や東脇殿といった主要な建物が直接地面に柱を埋め込む掘立柱式建物から石の上に柱を立てる礎石式建物に変わっています。

## “Function, change and character of the central compound of Akita fortified government”

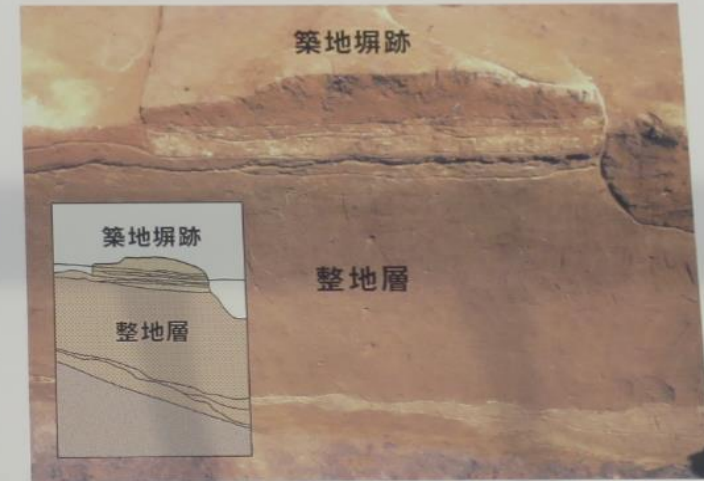
The time in which central compound existed is divided into six stages. Big changes happened in the third, fifth, and sixth stages. The compound is rectangle, 94 meters long from east to west, 77 meters wide from north to south.

The central compound is the most important area. Serving banquets for the foreign missions from Bohai and other countries were held here, in addition to ordinal political affairs and the winning Emishi, an ancient population in northern Japan.

## 政庁の特徴

秋田城跡の政庁は、東西94m、南北77mの東西に長い長方形をしています。南を正面とした場合、横長となる政庁は、古代東北の城柵では唯一の例です。

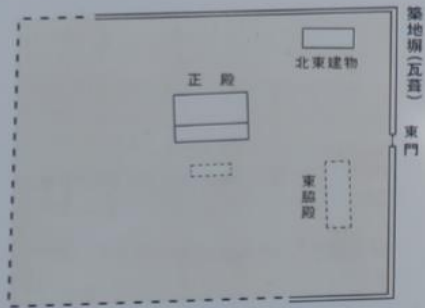
政庁域の旧地形は、北が高く南に傾斜していたため、創建時に一般的な縦長の政庁にしようと、南東部分の大規模な盛り土を行うなど南への拡張を試みましたが、地形上の制約から必要な面積を確保できなかったためこのような形になったと考えられます。



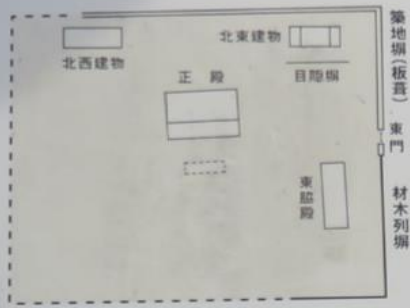
政庁域整地の様子

# 秋田城跡政庁変遷図 ( )の中は、およその年代です。

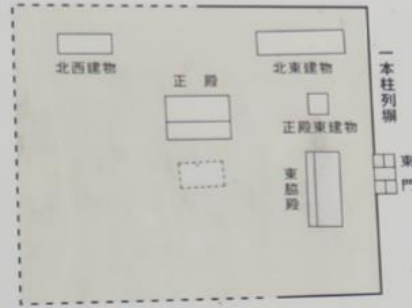
第1期 (733年～770年頃)



第2期 (770年～800年前後)



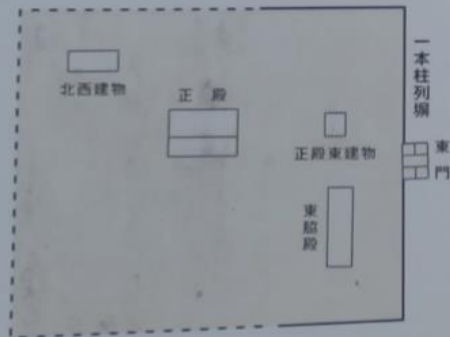
第3期 (800年前後～830年頃)



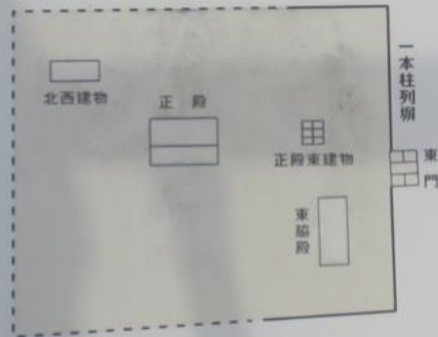
秋田城政庁は、ほぼ全期を通して正殿中心軸と正殿南入側の廊桁行柱筋を東西南北の基準線として、施設を配置しています。



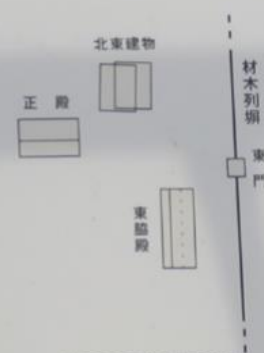
第4A期 (830年～850年頃)



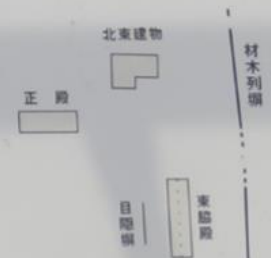
第4B期 (850年～878年頃)



第5期 (878年～925年頃)



第6期 (925年～966年頃)





# 政庁第1期 (733年～770年頃)

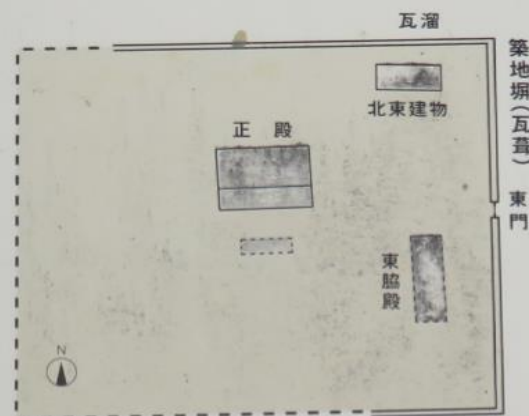
政庁は、秋田城の前身の「出羽柵」創建とともにその中心施設として造られました。

政庁を造成するにあたっては、旧地形が北が高く南に傾斜していたため、平地部分を確保する目的で、南東部分に大規模な盛り土による整地を行っています。

また、政庁内の中心建物である正殿は、白壁で床には塼せん（古代の煉瓦れんが）が敷き詰められていたことや、政庁を囲っていた築地塼の屋根には瓦が葺かれていたことが、発掘調査からわかっています。

このように壮麗な政庁を造ったのは、在地の人々が見たこともないような中国様式を取り入れた施設を作ること、律令国家の威信を示すという政策を色濃く反映した結果であると考えられます。

In the first stage, the main hall located in the center of compound imitated the style of China to show the dignity of the state. It used roof tile and stone paving. The Tsuiji wall surrounding the compound also used roof tiles. To set up the base of the compound, a mass of soil was brought over and laid there.



第1期 建物配置図



瓦溜 (東から)  
不要となった瓦を一括して投棄した場所



築地塼跡(北から)



東門跡(棟門)・築地塼跡(南から)

これが政庁第1期の復元模型



左手から見たところ





## 政庁第2期 (770年～800年前後)

この時期の区画施設は、崩壊した第1期の北半分の築地塀を築き直し、その屋根も板葺きに変えています。

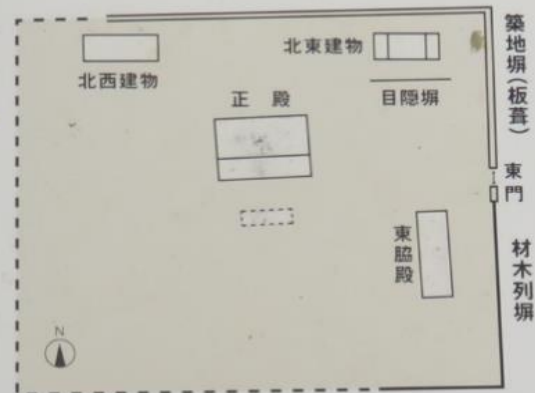
また、南半分の築地塀は、布掘りとよばれる溝状の掘り込みの中に、材木を隙間なく立て並べた材木列塀に変えています。

この築地塀崩壊の一因には、降雪や凍結など秋田の厳しい冬の気象条件が関係していたものと考えられます。

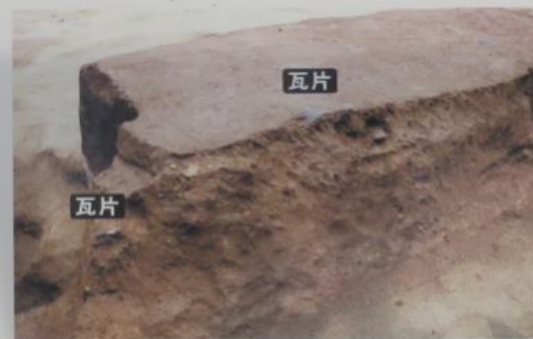
建物については、ほぼ同位置で建替えられた正殿や、東脇殿、目隠し塀を伴う北東建物のほか、新たに北西建物が建てられました。

また、第3期の建物の柱穴の埋土に焼土・炭化物が入っていたことから、この時期の建物は、焼失した可能性があります。

In the second stage, northern half of the Tsuiji wall surrounding the compound was rebuilt and southern half of it was converted into the timber wall by the strict climate of Akita. The result of the excavation suggests the possibility of burning out by fire.



第2期 建物配置図



築き直した築地塀に第1期の瓦片が混入している様子



材木列塀の布掘り跡(南から)

こんな塩梅



こちらは政庁第3期の復元模型



### 政庁第3期 (800年前後～830年頃)

政庁第3期は、中興天皇の御宇に、大規模な改築が行われた時期に当たります。

また、全体を精緻する建物の数が増えるとともに、正殿や東縁廊の東側も復元するほか、高麗製の瓦葺屋根には南が付いたなど、装飾物の精緻も進んでいます。内周施設についても、北側の御膳所を初め、御物の付木列廊とともに、等間隔に建てられて、その間を櫓材でふさぐ一本柱列が架かっています。

さらに東門も、柱間半間中より中半間に拡大する上にも、その構造も従来の様式から、八角門に変えています。

In the third stage, extensive renovation was undertaken. The whole surrounding wall was reinforced with an octagonal pillar wall. Holdings increased and the East gate was reconstructed as an eight pillar gate from rectangular gate.



## 政庁第3期 (800年前後～830年頃)

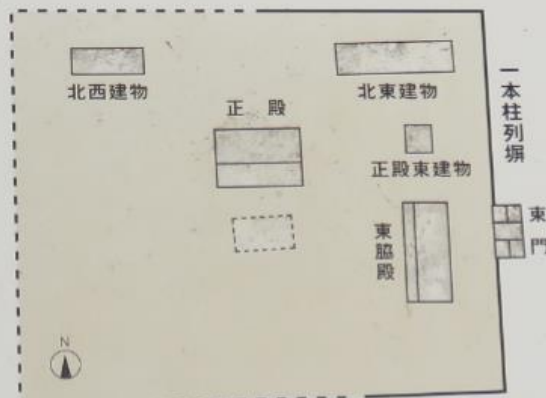
政庁域全体を再度整地するなど、全面的な改修を行った時期にあたります。

また、全体を構成する建物の数が最も多くなるとともに、正殿や東脇殿の規模も変化するほか、改築された東脇殿には廂が付くなど主要建物の構造も変わっています。

区画施設についても、北側の築地塀をやめ、南側の材木列塀とともに、等間隔に柱を立て並べ、その間を横材でふさぐ一本柱列塀に変えています。

さらに東門も、位置を東辺中央よりやや南側に変えるとともに、その構造も従来の棟門から、八脚門に変えています。

In the third stage, entire compound was reconstructed. The whole surrounding wall was reformed into an embedded pillar wall. Buildings increased most and the East gate was converted into eight-pillar gate from two-pillar gate.



第3期 建物配置図



北辺の一本柱列塀跡(東から)



東門跡(八脚門)・一本柱列塀跡



こんな塩梅



右手から見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



城内東大路を進み、その先にある外郭東門を目指す

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



これは城内東大路の先にある外郭東門の周辺を見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



これが外郭東門

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



「外郭東門」、「築地塀」と記された標石がある



## その説明板

### 外郭東門

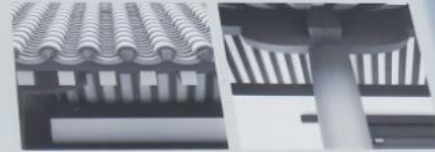
平成元年度の発掘調査で発見された奈良時代の外郭東門を復元したものです。

秋田城の東門の特徴は、軒先につく軒瓦がないこと、部材をつなぐところに猪肘木を使用していることです。

木材の仕上げは檜の穂先のような鈍という古代と同じ工具で削り、また、表面は丹土を塗っています。

○規模

正面（桁行）8.4m（2.7m×3m×2.7m）  
側面（梁間）5.4m（2.7m×2.7m）  
高さ 約6.3m（棟まで）柱の太さ42cm



軒先の様子

猪肘木

### 外郭築地

門の横に続いている土壁は築地とよばれています。土を人の手でつき固めながら積み上げる版築という古代と同じ工法で造られています。

復元した築地の端は途中で切れていますが、実際はずっと続いていて秋田城の回りを囲んでいました。また、築地の手前がある深さ7mの土取り穴は、築地を積む土を取ったときにできた穴で、後にゴミ捨て場として使われ発掘時には多数の漆紙文書、木簡それに猪、馬、鯨、鳥、などの骨が発掘されました。



漆紙文書



鳥、猪の骨



木簡

文字の書かれた使用済みの紙が、漆容器のふた紙として使用され、捨てられた後も漆がついていたために残っていたものです。

この文書は、奈良時代の秋田城の役人が、出張先で任務のやり残しは無いかを、上司に問い合わせた手紙です。

この木簡は、794年に書かれたものです。

These are the reconstructed buildings of the east gate and the Tsuji Wall, the outworks of the Akita fortified government office, which had originally been constructed in the 8th century and were discovered in 1989.

When they were reconstructed, the wall has been piled up after beating the soil to harden it.

The building materials for the east gate have been finished with ancient designed tools and colored with Indian red.

### 東大路

秋田城の外から東門を通り、政庁に向かう重要な道路です。素掘りの側溝の跡が発見されていますが、それから推定すると道路幅が12mで、今の道路と比べても立派なものです。ただ、敷石などが発見されていないので土の道路だったと考えられます。

文化庁・秋田市教育委員会

こんな大きな説明板もあった





西側から見た秋田城跡のジオラマ/方形の正殿の上部に外郭東門が見てとれる



この窪みは「土取穴」/左手に標石がある





これは外郭東門を潜り、城外鷓ノ木地区を見たところ



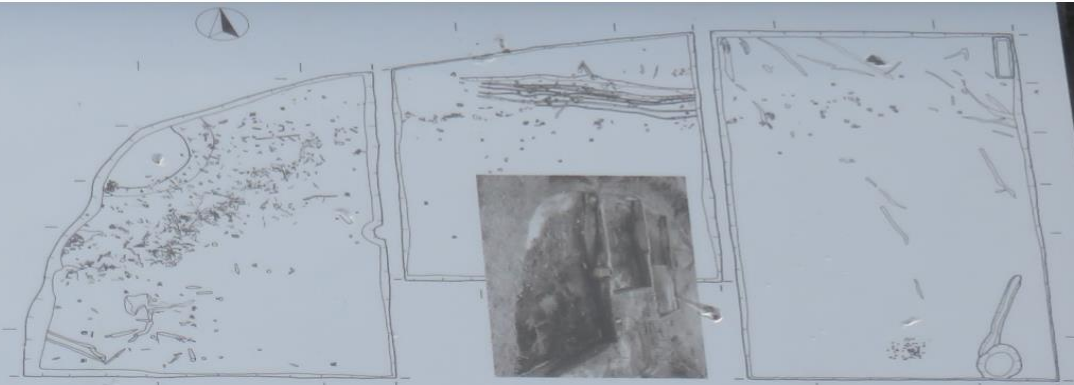
## 沼

前方の沼は、縄文時代以前に飛び砂によって沢が堰き止められてできた自然の沼を復元したものです。

沼は、城内でおこなわれた大祓などのまつりで使われた人形、斉串、人面墨書土器などを流す神聖な場として利用されています。

また沼底の泥炭層からはスギ、マツ、イネなど植物の花粉が多数発見され、現在とあまり変わらないようすであったことがわかります。

The marsh restored and seen before had been regarded as a sacred place in old days, and many religious handcrafts had been founded here.



大祓などまつりの儀式に使用された人形、斉串



人の顔の描かれた土器

そこから鶯ノ木地区復元建物(寺院・客館)方向をアップで見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



同じく古代水洗トイレをアップで見たところ/奈良時代後半の、客館に招いた人達のために用意された水洗トイレが復元されている



秋田城跡歴史資料館に展示されている秋田城跡のジオラマ/右下が鶺ノ木地区復元建物(寺院・客館)





さて、この建物が秋田城跡歴史資料館



展示室の様子

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



## 秋田城の変遷/第1期

# 秋田城の変遷〈I期〉天平5年(733年)～8世紀中頃 奈良時代

### The History of Akita Fort: Phase I

秋田城は、天平5年(733年)に庄内地方から秋田村高清水岡に遷された「出羽櫓」を、その始まり、創建とします。

当初は、城全体が壮麗な瓦屋根の築地塙により囲まれていました。城壁で囲まれた外郭の東西南北には出入りの門が造られました。海を望む西門は二階建てであったと考えられます。中心施設の政庁に向け、外郭東門と外郭南門から城内道路(大路・幅約12m)が伸びていました。

政庁も、瓦屋根の築地塙で囲まれ、正殿と脇殿に囲まれた正面の広場、北・北西の建物が配置されていました。外郭の門や政庁の正殿などの主要な建物は瓦屋根でした。

城内西側の焼山地区には、政庁南西側に掘立柱建物群があり、北西側には倉庫がありました。城内東側の状況はよく分かりません。城内南側の外郭南辺付近は竪穴建物がつくられ居住域として利用されていました。

城外南東側の鶴ノ木地区の小高い丘には、城に付属する寺院(四天王寺)が建てられました。当時は古代日本最北の寺院でした。

全体的には、大規模な建物群や施設が目立ちます。政庁や外郭の区画施設はともに瓦屋根の築地塙であり、特に外観を重視していました。

丘の上に立つ壮麗な役所でした。



## 秋田城の変遷/第2期

# 秋田城の変遷<Ⅱ期> 8世紀中頃～8世紀末・9世紀初 奈良時代

### The History of Akita Fort: Phase II

天平宝字4年(760年)ごろに「秋田城」と改称され、城全体が改修されます。

外側の城壁の築地塀は瓦屋根ではなくなります。政庁も、南半分が材木塀になります。外郭の門や政庁などの主要な施設の配置は変わりません。外郭東門から政庁に至る城内東大路は南側が塀で区画されます。

城内西側の焼山地区には、政庁南西側に掘立柱建物群があり、北西側の外郭西門近くには倉庫群と考えられる大規模な掘立柱建物群が建てられます。城内東側は鍛冶工房などの生産施設として利用されるようになります。

城外南東側の鶴ノ木地区の付属寺院は改修され、東側に客館(迎賓館)の建物群と水洗廁舎(トイレ)が増築されました。

城内焼山地区の倉庫建物群、城外鶴ノ木地区に客館が増築されるなど、外交・交流・交易の拠点としての整備が進みます。



# 秋田城の変遷<Ⅲ期> 8世紀末・9世紀初<sup>がんぎょう</sup>～元慶2年(878年) 平安時代

## The History of Akita Fort: Phase III

平安時代の初め、延暦年間<sup>えんりやう</sup>の末頃(800年前後)に、城全体が大改修されます。

外側の城壁は築地堀から柱列による材木堀に作り替えられ、新たに一定間隔で櫓が建てられます。海を望む西門は引き続き二層建てと考えられます。城内道路は道幅が狭く(約9m)なります。

政庁も、柱列による材木堀に作り替えられます。外郭の門や政庁などの主要な施設の屋根も部分的にしか瓦が使われなくなります。政庁は建物が増え、東門が八脚門になるなど施設が充実します。

城内西側の焼山地区では、大規模な掘立柱建物群が高床式の倉庫に建て替えられます。城内東側は全体的に鍛冶工房や役所の建物が急増し、活発に生産活動が行われます。城内南側の外郭南辺から東辺、西辺にかけて居住域が拡大し、竪穴建物が数多く建てられます。

城外南東側の鶴ノ木地区では、客館施設の建物群と水洗廁舎が取り壊されます。また、付属寺院(四天王寺)は、東側に位置をずらして全面的に建て替えます。寺院は天長7年(830年)の大地震で倒壊し、再び建て替えられます。城外南側も道路で区画されます。

この時期は、軍事的機能が強化されるとともに、城内の建物数や工房が増加し、役所としての実務的機能や生産施設としての機能が充実していきます。



# 秋田城の変遷 **Ⅳ期** がんどょう元慶2年(878年)～10世紀中葉 平安時代

## The History of Akita Fort: Phase IV

元慶2年(878年)に起きた元慶の乱で、焼失し被害を受けた城が復興されます。

外側の城壁は柱列による材木堀から、より強固な材木列による材木堀に作り替えられます。櫓も規模を大きくしたものに建て替えられます。また、城内東西道路(大路)なども大規模に道路面の造成が行われ、道路としては平安時代で最も整備されます。

政庁は、引き続き柱列による材木堀で囲まれます。瓦屋根の施設はなくなります。東門は四脚門になります。

城内西側の焼山地区では、大規模な倉庫群がなくなります。城内東側の大畑地区でも鍛冶工房などの生産施設が減少し、役所の建物もいくつかにまとまります。城内南半の外郭南辺から東辺、西辺にかけて居住域は引き続き利用され、竪穴建物が多く建てられます。

城外南東側の鶴ノ木地区では、付属寺院(四天王寺)の建物が規模を縮小し、移転したと考えられます。

全体に構造上の強化や防御性、軍事性などが重視されます。その一方で、城外南側は引き続き利用されますが、焼山地区や城外の鶴ノ木地区では主要施設が機能しなくなり、再編成された城内施設に機能が集約されます。



秋田城は小高い丘に清水湧く「高清水」の丘と呼ばれる、海上交通と河川交通の便がある低丘陵上に立地している

## ■秋田城の立地

秋田城跡は、秋田平野の西、秋田県を南から北に流れる雄物川が日本海に注ぐ河口の右岸、独立した低丘陵上に立地しています。日本海を間近に望む標高約30～50mのこの丘陵は、通称「高清水」の丘と呼ばれています。

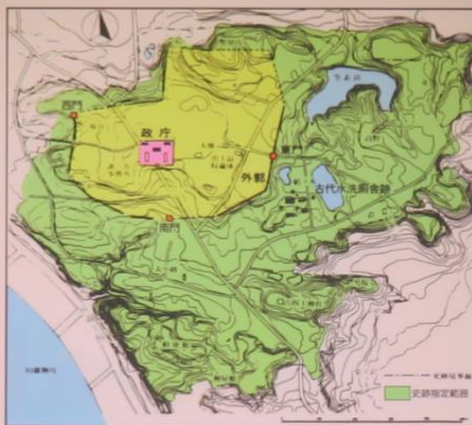
丘陵上には日本海から吹き上げられた飛砂が堆積し、秋田城もその上に造られました。小高い丘に清水湧くという名のとおり、丘陵上は良質な地下水に恵まれています。

海上交通と河川交通の便がある、見晴らしの良い丘陵上に秋田城はつくられました。



秋田城跡と秋田湾（南東から）

## ■秋田城の規模と形



秋田城跡地形図

城内には、政庁のほかに建物群や、倉庫群、鍛冶工房などの生産施設が、地区ごとにまとまりを持ち配置されていました。一方で、城外にも南東側の鶏ノ木地区のように秋田城と直接関連する寺院や建物群がありました。周辺の施設も含めて全体で、城柵としての機能を果たしていたと考えられます。

秋田城に関する遺構は、丘陵全体に広がっており、城外を含めた約90万㎡が国の史跡に指定されています。

秋田城跡は、全体を築地塀などの城壁で囲み、さらに中心施設の政庁も塀で囲む二重構造となっています。その形は当時の都をモデルにしています。

外郭、つまり外側の城壁で囲まれた範囲は、東西・南北ともに約550mで、その平面形は、地形の制約を受け、北西の一部が欠ける不整形となっています。城壁は丘陵の高い部分を取り囲むようにめぐっています。城壁に囲まれた面積は約24万㎡の広さです。

政庁は外郭内の中心からやや南西に位置しており、政庁区画施設で囲まれた範囲は、東西約94m、南北約77mで、その平面形は南を正面として、東西にやや長い長方形をしています。

外郭には、都城と同じく東西南北に出入り口の門が配置されました。現在まで北門を除く南・東・西門跡が発見されています。そのうち外郭東門から政庁まではほぼ直線的な東西道路、城内東大路が確認されています。



復元された外郭東門と築地塀

政庁は秋田城の中心施設で、重要な政治・事務や儀式が執り行われていた/正殿と呼ばれる中心建物や広場は、都の大極殿と朝堂院をモデルにしている

## せいちょう 政庁 ～秋田城の中心施設～

Ancient Administration Office: the Central Facilities of Akita Fort Ruins

### ■政庁とは～その形と役割



秋田城の中心施設である政庁は、外側の城壁に囲まれた範囲の中央やや南西寄りに位置しています。政庁は、律令国家が全国に設置した役所に共通して存在する中心施設です。重要な政治・事務や儀式が執り行われていました。

周囲を方形に区画され、正殿と呼ばれる中心建物とその前面南側に広場を持ち、その広場の東西両側に脇殿を置く規則的な建物配置を基本としています。その中央の広場(庭)を中心とした「コの字型建物配置」は、全国の国府に共通し、都の大極殿たいごくでんと朝堂院あさどういんをモデルとしています。最北の城柵である秋田城でもその建物配置は徹底されていました。

秋田城の政庁では、国府の重要な政務や儀式、北方の蝦夷や大陸からの使節を迎えての儀式や宴会などが行われていたと考えられます。

築地堀などで囲まれ、区画された政庁の規模と形態については、創建期で東西約94m、南北約77mで、南を正面とするやや東西に長い長方形をしており、他の城柵に見られない横長のプランが特徴です。

発掘調査の結果、残念ながら明治時代初期の旧国道の開削などにより南西側三分の一が削平・破壊されていることがわかりました。しかし、南北中心軸線をもとに東西・左右対称に造られる政庁施設の特徴に基づき、その全体像の復元が可能となっています。



政庁正殿跡(第40次調査・東から)



# 城外鵜ノ木地区について

Remains found in Unoki District Lying Outside of Fort

外郭外南東側の鵜ノ木地区は、城内よりも一段低い台地状の地形です。南半の小高い丘を中心として規則的に配置された掘立柱建物群が発見されています。

建物の配置が寺院に類似すること、付近から「寺」と記された墨書土器が出土すること、寺院で確認されるくわんげん柱遺構(三本柱遺構)が確認されたことなどから、秋田城に附属する寺院と考えられます。

歴史書に天長7年(830年)大地震で倒壊したと記録されている「四天王寺」に比定されています。奈良時代には古代日本最北の寺院でした。

建物群は、奈良時代から平安時代にかけて、I期～IV期の変遷が把握されています。I期建物群に天平六年(734年)の年号を記した木簡が出土した井戸跡、II期建物群に古代水洗トイレなどの重要施設が附属しています。III期になると建て替えにより建物の方位と配置が大きく変わります。

建物群の北東、沼地跡の西岸部で検出された古代水洗トイレは、8世紀後半のII期段階で南側の建物群とともに増築されます。井戸跡より物資や人の貢進を示す木簡が出土すること、大陸からの来訪者が使用したとされる水洗トイレの調査結果などから、II期段階には、寺院に客館(迎賓館施設)の機能が加えられたと考えられます。

鵜ノ木地区は、平安時代も寺院として利用されます。

建物群の北側の沼地岸边では、祓いの祭祀も行われており、引き続き宗教や祭りに関係する施設や場所として利用されていました。



秋田城はヤマト王権にとって日本海側の最北の軍事拠点/鎮兵と呼ばれる城柵に配置される兵士は東国から徴兵されたい

## 軍事拠点としての秋田城

Akita Fort Ruins as an Army Base

### ■秋田城の軍事的役割

最北の城柵として蝦夷の人々と接し、軍事的な緊張状況にもあった秋田城には、蝦夷の人々との争いに備え、軍隊も置かれていました。秋田城は役所であると同時に、最北の軍事拠点でもありました。

奈良時代に城の周囲を囲んでいた築地塙の城壁は高さ4m近くあり、城の守りともなっていました。平安時代になると、城壁に見張りや弓矢などによる攻撃のために「櫓」が建てられました。



復元された築地塙と櫓(盛岡市・志波城跡)



外郭櫓状建物位置図

### ■秋田城の軍隊～兵士と鎮兵～

秋田城に置かれた軍隊には、「兵士」と「鎮兵」がいました。

兵士は各国内から徴兵され、交代制で国府などを守衛する軍団に勤めました。兵士1,000人で軍団1つを構成し、出羽国には1軍団が置かれていました。鎮兵は東国から徴兵され、東北の城柵に所属して勤める兵士で、家族も伴いました。

奈良時代には、当初は秋田城に軍団の兵士が、奈良時代の終わり頃には鎮兵も配置されました。平安時代には出羽国において、出羽国府と秋田城・雄勝城にそれぞれ兵士と鎮兵の軍団が配分され配置されていた記録があります。

平安時代の中ごろには、秋田城に800～1,500人の兵士がいた記録もあります。

発掘調査により、それら軍隊の存在と活動、武器の管理などを裏付ける墨書土器や漆紙文書が出土しています。

#### 〈出羽国城柵位置図〉



- …発掘調査で確認されている城柵
- …所在が推定されている城柵



外郭材木築布面り跡とそれをまたく櫓状建物跡

# 秋田城をめぐる様々な交流

Akita Fort Ruins as a Regional Hub of Cultural Interactions

## ■古代の交流の接点・秋田城

最北の古代城柵である秋田城は、都を中心とする律令国家と蝦夷社会をはじめとする北方世界との接点・窓口でした。

城柵では北方支配・交易が重要な役割であり、最北に位置する秋田城は津軽(青森)や渡嶋(北海道)方面などの広範囲の蝦夷が朝貢や交易に訪れていました。

また、最北の拠点を支え、守るために、北陸地方や関東地方から、移民(柵戸)が移住し、兵士(鎮兵)が派遣されていました。人員だけでなく、多量の物資も送り届けられていました。秋田城には都から上級の役人が赴任し、蝦夷との交易のために訪れる人々もいました。

秋田の地には、南と北から様々な文物と文化がもたらされ、人々が集い、交流が繰り返られていました。

さらに、律令国家の「北の窓口」であった秋田城をめぐる交流は、日本海を越えた大陸・渤海国との外交にも広がりを見せています。



## ■古代の交通 陸路と海路

都をはじめとする律令国家内から秋田城に至る交通路としては、陸路として「官道」が整備されていました。各所に「駅家」を設けた駅伝制により都とつながっていました。また、物資の輸送に適した日本海沿いの海路もあったと考えられます。

北方世界へは、日本海沿いに航海路が伸びていました。縄文時代以来の交易・交流ルートが存在し、それは、大陸まで続く「北の海みち」であったとも考えられます。

秋田城からは、歴史書にも記録のある「鉅形(方)駅家」が記された書状漆紙文書が出土しています。秋田県南部の清水尻Ⅱ遺跡では、秋田城へ通じていた古代の道路跡も発見されています。

奈良時代から平安時代にかけて出羽国内の庄内地方と秋田城間に官道・駅家制度が整備されていたことがわかります。

### (出羽国の官道と駅家)



清水尻Ⅱ遺跡古代道路(官道)遺構

秋田城は北方世界との交流の拠点であっただけでなく、大陸の渤海国の外交使節(渤海使)を迎える外交拠点でもあった

## 秋田城をめぐる環日本海の交流

Akita Fort Ruins as a Hub of Cultural Interactions in the Circum-Sea of Japan Region

### ■都との交流

秋田城は奈良の平城京や京都の平安京に都をおいていた古代の律令国家にとって、最北の城柵であり、北の拠点でした。都からは秋田城と出羽国を治める国司が赴任し、様々な物や文化がもたらされていました。

貴重な北方物交易品を求め、都から多くの人々が訪れるようになり、秋田城からは、北方交易でもたらされた品々が都にもたらされました。最北の城柵と都は直接的につながっていました。

### ■北方世界との交流

最北の城柵である秋田城には、津軽や渡嶋(北海道)などの北方の蝦夷が朝貢や交易に訪れていました。秋田城からは、布や米、鉄、須恵器などの北方世界では貴重な品々が、北にもたらされました。ある段階には、渡嶋(北海道)の蝦夷を介して、それら品々は北海道の北に暮らすオホーツク文化の人々にももたらされていました。

古代に北方世界への窓口であった秋田城と秋田の地は、その後も海を通じた北方世界と強い繋がりを持ち、交通や交易の要衝としての役割を持ち続けます。

中世には三津七湊の一つ秋田湊として、近世には北前船の寄港地として、海運の要衝で有り続け、北海道方面と強い繋がりを持ち続けました。



### ■大陸との交流

奈良時代には、大陸の渤海国からの外交使節が出羽国に訪れていました。秋田城からは大陸から来訪者が使用した古代の水洗トイレや迎賓館施設が発見されています。

最北の城柵であり、北の拠点であった秋田城は、大陸の渤海国からの使いを迎える外交拠点としての役割を持っていました。

### ■東アジアの中の秋田

秋田城には様々な形で中国から文化と品々がもたらされました。

最北の古代城柵、「北の窓口」であった秋田城のある秋田は、東アジア文化圏の最北東端でもありました。また、国家に属さない北方民族が訪れる北方世界・北アジア文化圏の最南端でもありました。

秋田城は、中国の影響を受けた古代最北東端の瓦葺き(屋根)施設があり、漢字が使用される最北の役所でもありました。

東アジア文化圏の最北東端であり、「古代シルクロードの本当の終着点」である秋田は、東アジア文化圏と北方世界・北アジア文化圏との交流の結節点でもあったのです。

もちろんエミシに対する防衛と、蝦夷からの朝貢の対応・交易の拠点であったわけだが、しばしばエミシの反乱にも悩まされたと言

## 北方地域との交流～北方蝦夷社会と律令国家～

Exchange with the Northern Frontier in the Ancient Japan: Society of Emishi in the Northeastern Periphery and Ritsuryo Legal Codes Nation

### ■ 蝦夷の朝貢と饗給

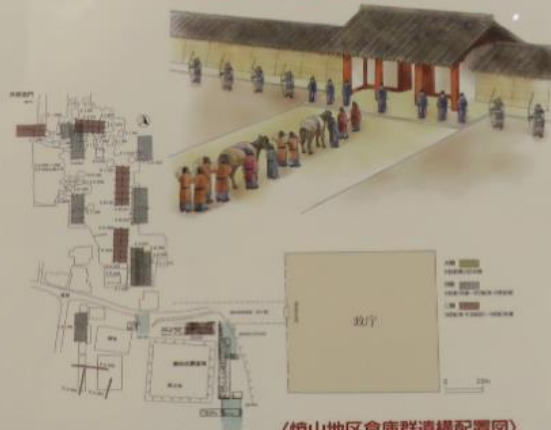
律令国家の拠点である東北地方の古代城柵には、蝦夷が服従の証と生活の安定を求めて、貢ぎ物を携え定期的に訪れていました。朝貢と呼ばれるその来訪に対し、城柵では国司が布や米などの賜物を支給し、饗応と呼ばれる宴会も盛んに行われていました。

### ■ 「狄饗料」木簡と大倉庫群

秋田城からは、饗応が実際に行われていたことを裏付ける「狄饗料」と記された木簡が出土しています。「狄」とは北方に住む蝦夷を示し、その宴会用の食料が秋田城に届けられたことが書かれていました。最北の秋田城には、北方の蝦夷も盛んに訪れていたと考えられます。

城内西側の焼山地区には、他の城柵にはほとんど見られない大倉庫群がありました。秋田城に大倉庫群があるのは、より広い範囲の多くの蝦夷に対する饗給や交易のための物資を、収納していたためと考えられます。

〈秋田城へ朝貢に訪れた様子〉



### ■ 北方地域との交易

北方世界と交流・交易は、歴史書から秋田城以前の7世紀代(飛鳥時代)に遡ります。律令国家の本格進出前には、阿倍比羅夫の北征が行われました。

秋田城以前にも渡嶋と津軽方面の津(港)を管轄する役所がありました。その津司は秋田にあった可能性が高いと考えられます。

秋田城には秋田以北の北海道までの広大な範囲の蝦夷が朝貢に訪れ、饗給を受けていました。それは実質的には交易でした。その交易は、平安時代になるとより盛んになっていきました。

交易には蝦夷を介してさらに北の「爾慎」(オホーツク文化の人々)が関わり訪れていた可能性もあります。

北方からは、特産品の馬、毛皮(クマ・アザラシ・ラッコなど)、鷹の羽、昆布などがもたらされ、秋田城を通して、都にもたらされていた。秋田城は北方交易の拠点となっていました。

一方で、北海道中央部では、秋田で生産され、北海道にももたらされた須恵器が多数発見されています。それらの地域は、秋田城と直接交流をもち、交易していたと考えられます。



## 周辺地域の様子 ～蝦夷村と郡郷制～

The Surrounding Areas of Akita Fort Ruins: Settlements of Emishi and Local Governance System "Gungo" (District and Village)

秋田城周辺は、律令制度下のもと戸籍に編成される百姓や帰属した蝦夷(俘囚)から構成される「郷」と、蝦夷集落の地域ごとのまとまりである「蝦夷村」とが併存する複雑な社会であったと考えられます。

### ■蝦夷の村々

秋田に出羽櫓が進出した当初の奈良時代前半には、秋田平野周辺には「秋田村」と呼ばれる蝦夷村が存在していました。秋田平野一帯のいくつかの蝦夷集落のまとまり、地域集団を大きく秋田村と呼んでいたとも考えられます。

平安時代には、秋田城の支配は秋田郡域を超え、さらに北方の蝦夷社会に及んでいました。秋田城の管轄下いわゆる「秋田城下」には、秋田城司との朝貢供給関係などゆるやかな支配を受けていた「蝦夷村」が存在していました。



源ノ子F遺跡で見出された蝦夷の盾

〈秋田平野周辺における古代遺跡の位置〉



秋田市南部の御所野台地では、平安時代の集落遺跡が、下堤C遺跡をはじめとして10遺跡以上確認されています。集落遺跡の多くは竪穴建物を中心に構成されていました。

集落の近くには、土坑墓や周溝を伴う小さな墳墓からなる墓域も確認されています。

蝦夷の村々はリーダー(首長)のもと、秋田城と密接な関係を持ちながら農業や漁労に従事し生活していたと考えられます。

### ■郡と郷

蝦夷社会と境を接する律令国家最北の秋田城周辺でも、平安時代の初めまでに、全国の律令制度と同じく郡郷制がとられ、「秋田郡」を構成するいくつかの郷が存在していました。

10世紀前半の「和名類聚抄」という書物には、秋田郡には添川・率浦・方上・成相・高泉の五郷が所在していた記録があります。このほかに、秋田城出土木簡にある「広面郷」のように、別な名前の郷が存在していた可能性もあります。



秋田平野の集落遺跡(下堤C遺跡)

### ■蝦夷の帰化と編戸

#### ～秋田郡の拡大と地域支配の強化～

平安時代になると秋田平野北部から八郎潟東岸部にかけても生産施設を伴う炭窯や製鉄炉などを伴う集落が増加します。また、石崎遺跡(五城目町)のように役所に関する遺跡も確認されるようになります。これらは秋田郡域の北への拡大を示すものと考えられます。

秋田城の周辺では、実質的な律令支配の強化を目的に、移民や俘囚の再編と集住が進められ、集落も増加したと考えられます。また、秋田城からは、蝦夷に対する戸籍への編入の進展を裏付ける戸籍や俘囚計帳様文書の漆紙が出土しています。

エミシの末裔は、やがて俘囚としての北東北の長となって安倍氏、清原氏、そして奥州藤原氏へと繋がっていく

# がんぎょう 元慶の乱について

An Intestine War in Tohoku Region in Heian Period (Gangyou era)

## ■元慶の乱とは

元慶2年(878年)に律令国家、秋田城司のかこくな政治に対して出羽国、秋田城下の蝦夷の人々が蜂起した事件です。秋田城とその周辺地域を舞台とした出羽国始まって以来の大乱であり、元慶3年(879年)まで続きました。

蝦夷軍が秋田城と秋田郡家、秋田城周辺民家を襲い、焼き打ちし、秋田城を一時占拠するなどして、官軍は苦戦して鎮圧は難航しました。中央から派遣された藤原保則が鎮撫して終息しました。

秋田城下の「蝦夷」村のうち、上津野・火内・楡淵・野代・河北・藤本・方口・大河・堤・姉刀・方上・焼岡の十二村が蜂起しました。これに津軽や渡嶋の蝦夷も加わったとされています。

このとき、秋田城周辺の添河(秋田市旭川流域)・蕨別(秋田市太平川流域)・助川(秋田市および河辺町の岩見川流域)の三村が政府軍方に味方したとされています。

〈元慶の乱関係要図〉



焼け残った政庁正殿の白壁(第40次調査)

炭化した東脇殿の柱(第72次調査)

## ■元慶の乱の記録と痕跡

元慶の乱に際し、歴史書には秋田城における施設の焼損や物資が略奪された被害の報告・記録があります。特に『日本三代実録』元慶5年四月二十五日条には表のように元慶の乱に伴う損失(焼かれたり盗まれたりした被害の総計)が報告されています。

発掘調査では、元慶の乱とその復興の痕跡が確認されています。

元慶の乱の被害を示すものとして、乱による火災の跡が確認されています。火災に伴う焼土や炭化物は政庁、大畑地区、外郭東門周辺、推定外郭南門・西門周辺など城の主要部分で確認されています。

政庁ではIVB期正殿建物の柱痕跡から焼けた白壁が、東脇殿では建物の炭化柱材が発見され、中心的な建物の焼失が確認されています。

元慶の乱後には、城壁をはじめとして城全体が強固に再建されています。

〈元慶の乱における被害〉

品目	被害部
穀類	420,501束6把8分
糶	750斛
軍槍甲冑	347備
鐵鉢	533枚
鐵鉢	157枚
革鉢	50枚
木鉢	326枚
箭	8,380隻
大角	6枚
小角	8枚
大刀	60面
弓	55柄
鐵鉤	71張
鐵鉤	55柄
手鑊	29具
鐵鑊	100具
鐵鑊	13柄
鐵鑊	8柄
鐵鑊	52枚
鐵鑊	181平
鐵鑊	73平
鐵鑊	108平
宮舎	161宇
城櫓	28宇
城櫓	27基
城櫓	61基

